子供讃歌（一四）

倉橋惣三

一三　心のふるさと

1　灰の中の人形

大正十二年九月一日

夏季休暇中の講演旅行から、ゆうべおそく歸つて、久しぶりの郊外の家の縁側に、のんびりしていると、ドシンと來た。はげしい上下動である。家人を促して庭へ飛び出した。強い震動。門の前の空地に新築中の二階家が傾いたと思つたら、がら〳〵と倒れた。震動がつゞく。遠い都心の空に赤黑い土煙が立つ。お茶の水！？　幼稚園も本校もまだ休み中だ。園兒は來ていないから第一の心配はない。やつと運び出した籐椅子をならべて不安の夜を迎えた。どの方角、というよりも、東京の空が一面に眞紅である。その火の中に、幼稚園がある。幼兒たちの家がある。

眠られぬ野宿の夜が明けた。とにかくぢつとしていられぬ。握飯と水筒をもつて出かける。一度も徒歩で通つたことのない遠い道だ。お茶の水の橋に着いたときは足が痛い。が、焦土の中を築山のあたりに立つた彼は何を見たか、はたから見たら、こういう姿をこそ呆然というのであろう。

後に彼はこう書きとめている。

『くづれた煉瓦と、うづ高い灰と、焦げた木材の破片との中に、土臺の礎石だけが整然と殘つている。それが、各室の位置と區劃とを、あつたまゝに示しているのも却つて佗しい。丁度ついこの間、外部全體の塗替工事をやつて實に何十年振りの新粧の美を凝した幼稚園を、今このさきに見ようとは、餘りにも思いがけないことである。

私は、先づ事務所の位置に立つて見た。それから廊下を通りぬけて、遊戯室にはいつた。その右手の玩具室にもはいつた。それから他の室を一つ〳〵通つて見た。……そして私の見たものは、たゞ「無」であつた。ほんとうに無であつた。何もない「無」であつた。

……

私は、あちらこちら校内(建てものという建てものは何一つ殘らず燒けて仕舞つて、ガランとした)を一周した後、又もう一度幼稚園の燒け跡に立つた。私にとつて一番なつかしいところは、やつぱり、あの幼稚園であつた。そして、もう一度玩具室の方へ行つて、灰の中をつゝいて見た。何か淋しい記念になるものでもと思つたのである。しかしそんなものは、どう探しても見つからなかつた。ほんとうに何もなかつた。たゞ僅に見出し得たものは、幾つかの陶器性の白い人形の首だけだつた。私はぞつとするような心持ちで、それを拾いとろうともしなかつた、そして、空しく、灰の中にステッキを立てゝ佇立しながら、あの怖ろしい日がまだ幼兒の集らない休暇中であつたことが、不幸中の如何に大きな幸であつたかということを、今更のように思つた。

これはお茶の水幼稚園だけのことだが、廣く東京市中、幼稚園の燒失せるもの公立十、私立三十三、託兒所の燒失せるもの十四、殘るもの僅に三、四という有樣であつた。この大きい慘害に對して、素より必要の臨時施設は行われたが、幼兒生活(だけに就ていつても)にとつて未曾有の不幸であつた。

2 ゞ ゞ 保 育

早く幼稚園を開きたい。小石川の某女子專門學校の好意によつて、その二教室を借りることができた。幼稚園としての何んの設備もない。幼兒用の椅子もテーブルもない、床板にゞゞを敷いて、遊戯もすれば仕事もした。命名してゞゞ保育という。

嘗て大阪で、天王寺の境内で『露天幼稚園』というのが行われ、彼もその着想を推賞したことがある。後、『青空教室』『草原教室』で、格別突飛のことでもないが、部屋なし幼稚園、移動幼稚園というところに、プラス、マイナ

ス兩論があつたのに對し、これ亦とつさの一法として以上に、長所も擧げられないではないという論を立てたのである。已むを得ない。『ござ保育』は要するに假りの場である。若し强いて長所を擧げれば、恒常の設備がないだけに工夫に頭を使ろ――先生も幼兒も――という點であろう。平生設備にばかり注文をつけて、理想の幼稚園を描きつけているものには、いゝ藥にもなり、工夫の好機會でもある。彼は、田舍家の土間にござを敷いてまゝごとをする子らや、アメリカの幼稚園で、おはなしとなると、幼兒が椅子からおりて床の園座にあぐらをかいて、先生を取りまく光景などを連想して、一種の興味をもたされたりした。そうして『保育はどこでもできる』という、濫用されてはならないが、しかし極めて大切な結論を與えられたのであつた。實をいうと彼は當座の假り保育場を探し歩きながら、こなん際にこそ、型にはまらない、『幼稚園』らしくない、『子どもの部屋』といつたようなところを求めたが、そんな望み通りのところが容易にあるものではない。つまるところ、世にも最も殺風景な學校の教室にござを敷いた譯であつた。（貸して下さつた學校の好意に對してこんな言葉を使つては濟まないが）そうして、教室と保育室とは決して同じところではないという、分りきつたことを、これも一つの結論として經驗したのであつた。

こう書くと、秋から冬へかけての假保育場が、如何にも不足不滿の半ケ年であつたようだが、決してそういう譯ではない。子ども達は、いつでも樂しかつた。どこでも、樂しいのが子供である。先生達も、設備のないのを苦にしながらも、子ども達にひきづられ、促したてられて、不便は忘れて樂しくされつゞけた。寄附の大ピアノも大きい聲で歌をうたつた。宮樣方始め諸所からの寄附の玩具連も賑かな笑い聲を立てゝ騷いだ。

そうこうしているうちに、三月がにこ〳〵と迎えに來た。なつかしのふるさとお茶の水に、バラツクながら、前の形のまゝに建てられた幼稚園え歸る三月が來た。

3　大銀杏と藤棚

借り部屋でもバラツクでも、假りの場ではあるが、假りの保育ではない。子供の生活に一日の假りもない以上、保育にも一日だつて假りはない。假りにも假りの保育といつた感を起してはならない。というのが、當時互に戒めあつた心がけであつた。それどころか、燒け野原の東京の子らには、あの設備の整つていた時よりも、よい保育を日々に

與えなくてはならないというのが、自ら勵ましあう心もちであつた。

たゞ、子供達が歸つた後など、彼がまたしても帳然として立つたのは、あの古い藤棚の跡であつた。太い古株から、くねつた枝を廣い棚にはいひろげて、美しい葉の屋根、涼しい葉かげに、子供達をよろこばせた、あの藤棚であつた。古い江戸名所圖繪にも殘つているが、この幼稚園を訪う人々の記憶には必ず殘る新しい名所でもある。今の皇太后陛下が行啓の際、九條家のおひいさまとして、この幼稚園に通われた幼時の記憶を殊にこの藤棚の下の遊びに偲ばれたこともあるゆいしよのある記念樹でもある。

大塚に本建築ができて移つてから、彼は庭に意を用いたが、その間、何よりも彼の心を滿たしたものは、丘の上の大銀杏を圍いの中に取り入れたことゝ、お茶の水の燒け跡に思いがけず新芽を出した藤を移し來つて棚につくつたことである。大銀杏と藤棚とは、お茶の水幼稚園の二つの大切な自然の魂である。銀杏は同一のものではないが、古いことゝ大きいことにおいて同じである。藤棚は初代のものよりは小さいが根は同じである。人工の建物は、新しく改善せられるがいゝ、自然に昔のまゝの面影の有することは幸である。大塚へ移つても、大塚のお茶の水の幼稚園と、人も自分達もよびならわしたが、彼も、藤棚の下に立ち、大銀杏を仰いでは、大塚のお茶の水をなつかしんだ。日本最初の幼稚園としての發祥の地を去らなければならなかつたことは遺憾であつた。しかも、そうした大きい歴史のほかに、彼の追憶にいつまでも殘るであろうものは、子供讃歌の心のふるさとである。彼が畫家であるならば、大銀杏と藤棚の四季を、大小幾面のカンバスに描きたい。彼が詩人であるならば、長短幾篇の詩を、大銀杏と藤棚に寄せて詠じたい。そうして、その下で長年彼の心を育てつゞけてくれた幼兒達に對する感謝と禮讃のまごゝろを深くその自然に止めたい。

（つづく）